ア、もう歸つて來た。一遍様子見るワ……ワーツ可かん、お父つあんが坐つてる……怖い顔して煙草吸ふてるで……中坊ん、お前一番先に出たのや依つて先き這入り』『阿呆らしい、弟が兄より先へ往けますかいナ。まア兄さんから』『ショム無い處で遠慮しよる。まア奉公人の居ぬ間に這入る方が增しや……ヘエお父つあん、お早ふさんで……』『何がお早ふさんぢや、コレ作次郎。こなたは二階に居る筈ぢやに、何で表から這入て來なさつた』『ヘエ……』『ヘエぢやありやせん。何處へ往てたんぢやい』『實はその……夜前は謠ひの會に參じます約束がしてムりましたので、ソツと拔けて出て解らん様に早ふ歸る心算でムりましたのやが、ツイ〳〵夜が更けましたので……』『コレ嘘も宜い加減にして置きなされ、豪い謠が有た物ぢや。奉公人の手前もあるわ極道奴が、誰にも見られん内に二階へ上り腐れ』『ヘエ……』『……中兄。兄貴どない仕よつた』『エライ怒られて、今二階へ上らはつた』『そんならお前早ふ往き』『フム……。ヘーツ。お早ふさんで……』『彦三郎。お前も二階に居る筈ぢや無いか、何んで表から這入て來たんじや』『ヘェ……昨夜は宗匠の處で開きがムりましたので、鳥渡内密でやつて頂きました處が。マアつい其、餘りはづみましたので、早ふ歸る積りのが、思はず夜通し……』『嘘吐けツ』『イエ本眞吐いてます』『本眞吐くちう事があるかい。呆れて物が云へん哩、二階へ上ろツ』……『オイ歸たぞコラ親爺。婆ア。お歸りと吐かさんかイ』『ギェッ。そ、そ、夫りや何ちう狀ぢや。裸足で尻捲て、肩へ拳骨突張り腐て、何處へ往てたんぢや』『問ふ丈け野暮ぢやい。新町へ遊びに往てたんぢや。遊びと云ふたら女郎買ぢや、姫買の事ぢや解たか。乃公は二階で寢轉でる依て、茶が沸いたら飯食ふたるさかい直ぐ知らせ。何なら二階へ持て上れ。宜えか賴むぞ。テトロシヤン〳〵』……『なア良人つあんいナ』『何ぢや婆どん』『妾しやモウ情無うて涙も出やせん、現在の親を捉まえて親爺ぢやの、婆アぢやの隱すでも有ふ事か、女郎買に往たんやなんて大きな聲出して、彼んな奴を產むだかと思ふと、妾しや貴方に面目ない、其處へ往くと作次郎は謠ひの會へ往たとか、又彦三郎は發句の卷開きに出たとか云ふ丈け、未だしほらしい處が有ると思ひますわいナ』『併しなア婆どん、此家の相續をさすのは、どうやら吉松より他に無いらしい哩』『何で又撰りに撰つて、あんな無茶者を見込みなさるのや』『それでもなア。彼奴丈けが眞個の事を云ひよつた』

此話は初代笑福亭松鶴が得意で演じて居りましたのを、二代目松鶴が更に工風した物だ相で有ります、明治初期桂慶治と云ふ人が演りました時は、二枚札と申しまして平常の木戸錢の倍額を頂きましたが、尙滿員で有つたと云ふ事を故文我師から度々聽きました。初代桂文團治(鹽鯛)が矢張り此噺を得意に演じて居りましたのを、當時未だ若かつた艷文亭かしく(後二代目桂文之助、京都東山の高臺寺で甘酒屋を創めた人)が、樂屋から聽き覺えまして文團治の癖を其儘、文團治の物眞似として演りました處が大層評判が宜かつた相であります、私は文之助師より傳えられました物に、筋を壞さぬ範圍で腑に落ちぬ節々を直しました。此噺の最も聽き處で有る吉松の獨白が筆記ではとても充分に表す事が出來ませず、從て隨分お讀み辛い個所も有らうと存じますが。編輯者とも相談し合ふて出來る丈け口演の通りを寫す事に勉めましたので、ヨタな速記よりは、聊か味が出るで有らふと、私かに自負して居る次第でムいます。(松鶴)